

## 『ロータリーソングよもやま話』

今最近、コロナ禍の状況でロータリーソングは歌えませんが、例会にはロータリーソングは欠かせません。

ロータリーが誕生して2年目の1907年頃、ささいな意見の相違が次第に大きくなり、シカゴクラブ内が割れ、出席率も低下するという事態になりました。親睦派と奉仕派との意見が対立していたのです。

当時の親睦委員長のウィリアム・ネフは「このままではクラブは崩壊する。君が毎週立ち上がり、楽しく歌ってこの危機を救ってくれ」と印刷屋のハリー・ラグルスに懇願しました。

ラグルスは当時流行っていた歌を音頭を取って歌って以来、クラブの団欒は甦り、これが何年も続いて、例会での合唱がロータリーの伝統となりました。

日本最初のロータリークラブは、1920年創立の東京ロータリークラブですが、初めの頃は、「ロータリーソング」として英語のまま歌っていました。やがて、日本語によるロータリーソングを求める声が高まり、「奉仕の理想」や「我らの生業」が昭和10年(1934年)に京都における地区大会で日本語ロータリーソングとして発表されました。

戦争中は、ロータリーは軍部に睨まれる存在でした。RI本部がアメリカにあるため、スパイの容疑もかけられて、例会には必ず憲兵が常在していたそうです。

そこで、日本のロータリーは国への忠誠を現わすために「君が代」を斉唱するようになりました。しかし、軍部は厳しく対応し、全てのロータリーを解散させてしまいました。解散後も、各ロータリーは水曜会などと名称を変え例会を続けたようです。大変勇気のいる決断だったと思います。

その時にも、ロータリーソングは歌われていたようです。

昭和24年(1945年)日本は国際ロータリーに満を持して復帰しました。

そして、昭和26年(1951年)にロータリーソングが募集され出来たのが、名曲「手に手つないで」と「それでこそロータリー」です。

ロータリーソングにはそれぞれ重い歴史が有り、今に受け繋がれてきていることが知れます。

